

るので、このこととの関連も含めて今後研究を進めたいと
思う次第である。

(静岡県静岡市)

桂川甫筑と御蔵島

新藤 恵 久

御蔵島は東京の南方海上約二百三十キロに位置し、三宅島からは東南十八キロにあり、同島の特産ツゲ材は古くから印材、櫛、そして木床義齒の床材の最高級品として重用された。

御蔵島は江戸初期より天領であり、三宅島の属島であった。さらに「諸用向の伝達が不便な為」として御蔵島の神主印は三宅島で預かり、島外との交渉はすべて三宅島の地役人によって代行された。

御蔵島民にとって唯一の財源であるツゲの輸送は三宅島の廻船によって江戸に運ばれ、代金は三宅島が勝手に管理していた。そのため三宅島の役人の私腹を肥やす不祥事が頻発し、御蔵島島民は長い間貧困にあえいでいた。三宅島

役人の不正の範囲は次第に広がり、享保年間には神主印を無断使用して御蔵島にツゲの山を借金の抵当にするという事件まで起こった。

度重なる不祥事と苦しい生活に御蔵島島民が三宅島からの独立を決意したのは十八世紀の初めである。たまたま正徳三年（一七一三）、江島生島事件に連座して御蔵島に遠島処分になっていた江戸城大奥の典医・奥山交竹院は、神官加藤藏人を中心とする独立運動に同情し、友人の幕府典医・桂川甫筑に島民の苦しい実情を訴えた。

この時、甫筑は年寄（休職中）の身であったが熱心に幕閣に働きかけた。その結果、享保十年、島民の悲願は達成され、ツゲ材は直接に送られるようになった。交竹院はこの喜びの日を見ることなく、享保四年、世を去った。

島民のちに奥山、桂川、加藤の三人を神社に祀り、その功績を称えた。三人を祀った三宝神社は、御蔵島の総鎮守稲根神社の境内地にある。

以来島民は境内内に生えた葎など島の産物を毎年江戸の桂川邸に送り、一方桂川家からは医薬品を島に贈り、両者の交流は明治期まで続いた。

（日本歯科大学）

原沢文伸『青洲先生聞書』と伊藤震山『春林軒随筆』による華岡青洲乳癌手術記録の再検討

蒲原 宏

華岡青洲の乳癌手術症例は『乳岩治験録』その他の記録によっても、初診から手術終了までの経過が詳細に記録されているのは、第一例の大和宇智郡五條駅、藍屋利兵衛の母勘六十歳以下五名にすぎない。『乳岩姓名録』にある乳岩手術後の再発手術例は五名であるが、それら手術例の予後の不明のものが多くことは、すでに「華岡青洲の乳癌手術についての医史学的検討」（ガンセンター新潟病院医誌七巻二号九一〜九四頁昭和四十二年）で報告してある。

青洲自身による手術例の詳細な記録と予後調査は少ないので、華岡春林軒塾に学んだ医師の在塾中の見聞録にある乳癌手術症例の記事は貴重な傍証資料と考え追加報告とす